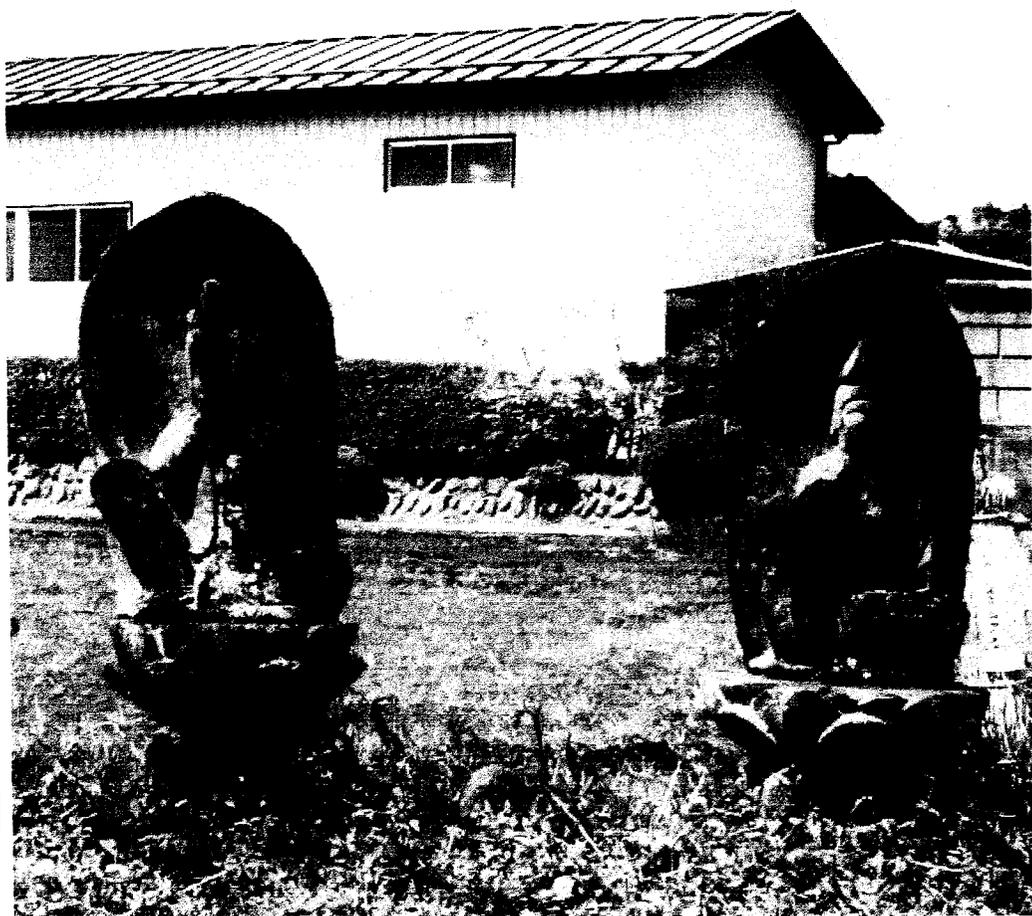


あいだ

183

発行＝『あいだ』の会

月刊 2011年5月20日発行 1部360円



栃木県日光市 photo. Katsui Kirya

あいだ183号 目次

緊急報告：東日本大地震（1）「文化までは破壊しない、人間が自ら捨て去らない限り、たとえ大津波であろうと」——気仙沼市「リアス・アーク美術館」での危機体験 山内宏泰 ……2

緊急報告：東日本大地震（2）消えた街に思いを寄せて 高山登 ……7

対談＜帝國＞の時代のアートとアーティスト（前） 白川昌生×小田マサノリ ……10

《書評》鳥羽耕史『1950年代』 高榮蘭 ……28

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第81回 相互浸透する北米アジア研究の現状と、閉塞する日本研究人文学の凋落と——第70回北米アジア研究学会ホノルル大会・傍聴記(その2) 稲賀紫美 ……31

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第81回

相互浸透する北米アジア研究の現状と、閉塞する日本研究人文学の凋落と——第70回北米アジア研究学会ホノルル大会・傍聴記(その2)

稲賀 繁美

(いなが しげみ/国際日本文化研究センター, 総合研究大学院大学)

【第2日 4月1日(金曜日)】

Session 237: Rethinking the 1911 Revolution in Global Context (Room 322A:8:00 AM-10:00AM)

1911年の辛亥革命を世界史的に問い直すとの表題で、竹内好、宮崎滔天、北一輝、梁啓超を論じるセッションがあったので出席してみたが、ハリー・ハルトゥーニアンの影響を濃く受けた極左？マルクス主義者たちの集まりだった。座長のViren V. Murthyは辛亥革命が共産主義革命とは無縁で「革命」とは見なし難いという近年の中国側の説に対抗する意味で、竹内好の鲁迅論を援用する。明治維新がブルジョワ近代性を準備したのに対して、辛亥革命はそれに失敗したがゆえに、かえって毛澤東によって儒学的な「天下」の概念が人民という革命主体に読み替えられるための契機を孕んだ、と見る。さらにシナ中心主義の漢学から近代シナ学への脱皮のなかで、西欧的な「文学」や「思想史」が準備されたとし、この文脈で西晋一郎の倫理学に言及し、「無化の構造」を梃子に儒教のヘーゲルの弁証法的解釈が成立したとして、その思想史的復権を提唱する。Christian Uhlは滔天、徳富蘇峰に北一輝の「国体論及び純正社会主義」を紹介し、大陸浪人系日本人右翼への従来の否定的な評価を覆し、むしろそれ

をマルクスの唱えた「世界資本主義へのロマン主義的不快感」と再解釈する。

つづくJing Tsuは、辛亥革命と華僑との繋がりを論題に掲げたが、実際には1911年に先立つ時期に苦力が6万人以上南アフリカに移送された件を取り上げ、当時の民族主義言説と労働力移民問題との乖離を強調した。インテリ文人ではなく離散華人プロレタリアートから革命が発生すべき、という教条を前提とした議論だが、その背景にはハイチ革命を重要視するようなディアスポラ革命史観が控えているようだ。梁啓超を論ずる予定だった発表者も欠席のため、孫文ら革命党とマレー系華僑や日本亡命組をつなぐ人的脈絡に言及はなし。討論者のTakahiro Nakajima 中島隆博も大震災のため欠席。思想史関係の発表者たちは日本留学組だったが、中国研究者との接点は不明。片々たる文献から大胆な図式を描き、通常的主流派の通説に対抗しつつ定説を覆そうとする理論派研究の典型を見る思いだった。

Session 277: The Dark Valley: Japanese Art and the Second World War (Room 302A 10:15AM-12:15PM)

明治維新という「ブルジョワ革命」が帝国主義と結託した末路が世界大戦ということになるが、「暗い谷間：第二次大戦と日本美術」は、「暗い谷間」と呼ばれてきた

戦時下が実際には戦時動員による高揚期であり、経済的到達点であり、国家間の文化交渉も著しく活発だった時期だったと規定し直す。

まずAkihisa Kawada河田明久が戦争美術の社会的役割と題して「支那事変」(1937)以降の動向を「靖国」を軸に述べたが(修正前のパワーポイントが映写されたものか?) 英語はManchuria Incidentと表示されており、これは1931年だから、年代的展開がやや不明確。マルクス主義侵略史観とは違って、日本外交史や軍事史の専門家は、「満洲事変」から「支那事変」への展開を、計画的な連続とは捉えていない。洛陽あるいは大同の石窟仏教遺跡への取材も、日本軍の華北侵攻とともに37年以降に隆盛をみたものと、時期を特定できる。川端龍子が仏教遺跡視察の成果を「陸軍作戦記録画」として《洛陽攻略》に問うのは、河田の指摘のとおり、1944年と遅れる。だが龍子は37年にはすでに占領後の大同一番乗りを果たしたひとりであり、「支那事変」勃発前にいち早く「大陸三部作」を構想していた。《朝陽来》(1937)に始まり、《源義経》(1938)(大陸に雄飛しチンギスカンとなった、との伝説に取

材)以下、画家自らが「戦争画」と位置づけたこれらの作品は、当時から、横川毅一郎らによって、その時事的な先駆性が注目を集めていたはずだ。これについては、『文藝春秋』が1938年に菊池寛の肝いりで刊行した欧文宣伝誌『Japan Today』の復刻版(作品社、近刊)の、森口多里の記事への拙解説(『Japan Today 研究』147頁)をご参照いただきたい。いささか細部にこだわるようだが、骨太な論旨と編年・地理的展開の正確さとを確実に噛み合わせることが、北米の学会発表では枢要だろう。

Asato IkedaはJoshua S. Mostowの学生であることが歴然とする立場に立つ発表で、宣戦布告なき「十五年戦争」は、最初から織り込み済みの展開だったとする前提にたつての議論。小林古径の《出湯》(1921) [図1]から小倉遊亀の《入浴》(1938)への同一主題の展開は面白い着眼だったが、それを大正シックから昭和の彫琢へと文脈に乗せる議論には質疑もあった。

三人目のLouise MacDonaldは専門の藤田嗣治の戦争画、とりわけノモンハン事件に取材した《哈爾哈河畔之戦闘》の献納版と、秘匿され現在行方不明の版との比較を

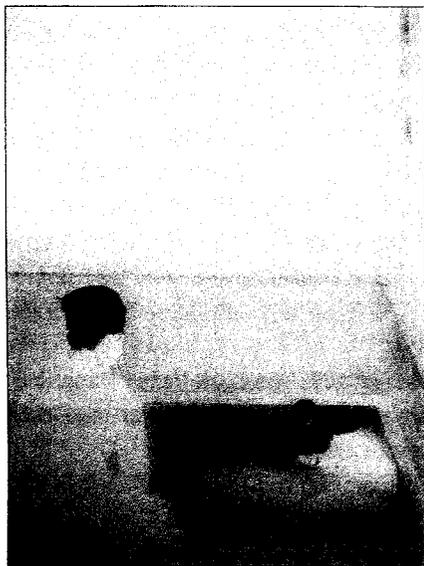


図1 小林古径 《出湯》1921

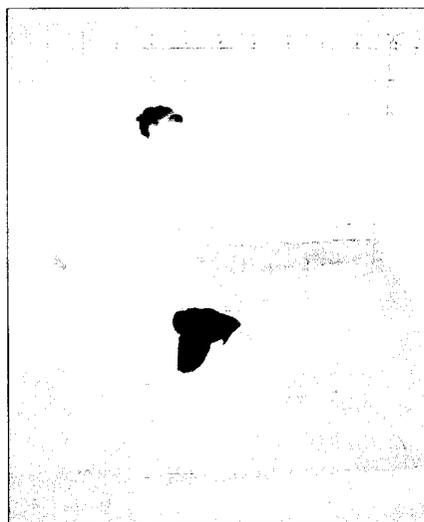


図2 小倉遊亀 《入浴》1938



図3 藤田詞治 《哈爾哈河畔之戦闘》(部分) 1941



図4 蔣兆和 流民図(部分) 1943

提案。前者「図3」はハルハ河西岸に渡河した直後の7月3日、後者は右岸で敵軍に包囲された8月24日の光景と、各々の戦闘期日まで特定したが、うかつにもこれは初耳。当方の推定ともほぼ一致はするのだが、はたして荻州立兵司令官の手記などから確認できるのだろうか、尋ねそびれた。

つづくKure Motoyuki 呉孟晋は同時期の中国画壇の水墨画に注目し、張大千の兄にあたる張善孖Zhang Shanzi (1882-1940) や蔣兆和 Jiang Zhaohe (1904-86) ほかの画業を「支那事変」下の時局のなかに位置づけた。抗日宣伝雑誌を飾る。張の吼える虎＝中華の寓意から、日本占領下の北平の惨めな難民の群像「図4」といたる、同時代中国絵画の大作に描いた蔣の、曖昧なメッ

セージへの政治的な振幅が確認される。

最後に発表した座長役のMing Tiampoは、「具体」グループについての優れた総括的研究 *Gutai, Decentering Modernism, Chicago U.P.* 2011を英文で公刊したばかりの若手研究者だが、彼女は河原温の《浴槽》シリーズ(1953-4)「図5」における断片化した肉体表象を、当時の世相や美術批評界の動向に重ね合わせ、小田切秀雄や荒正人、針生一郎などを巻き込む(いかにも時代を感じさせる)論争と絡めつつ解析した。

いずれも充実した発表であり、予告された英文論文集の刊行が期待されるが、全体としていささか盛り沢山すぎて焦点が絞れない恨みがあった。とかく日本で学術的訓練をうけると、往々に情報を盛り込みすぎ

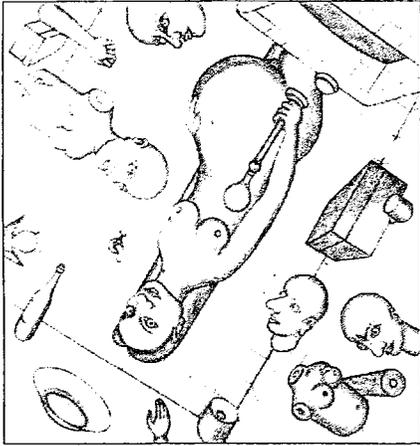


図5 河原温 浴槽シリーズより 1953-4

て、表明したい意見の見通しが失われる。ひとつの可能な導線を示唆するならば、例えば戦中・戦後画における人体表象に的を絞ることもできたはずだ。個々人の肉体表象が、近代戦においては軍隊組織の集合的表象と二重になる。これについてはNorman BrysonがJean Louis Davidを例に、ホップスの『リヴァイアサン』[図6]を理論的枠組みに(秘かに)援用しつつ、厚利な議論を展開していたはずだ(Visual Culture, 1994, 所収論文)。また土門拳は藤田の戦争画制作を身近に観察した写真家だったが、アッツ島玉砕以降、もはや戦意高揚が目的とはならず、軍隊組織の壊滅という反秩序の光景が、藤田をして構図を意識しない無軌道な即興的制作に向かわせ、結果として鬼気迫る傑作が生まれた、といった観察を述べていた記憶がある。総括の質疑応答のなかでは、何をもって戦争プロパガンダ美術と見なすのかという範疇論的な問いに対して、河田氏が「宣伝とは存在でなく機能であり、範疇論的枠付けは危険」、と鮮やかに切り替えたのが印象に残る。

**Session 300: Behind and Beyond the Lens:
Photography in Imperial Japan, 1896-1945**

(Room 305B 12:30 PM-2:30PM)

戦争とは武力により国境を侵犯する行為



図6 ホップス 『リヴァイアサン』1651

だが、ここまででも「越境=浸透性」が今回の大会の隠れた主題であることは明らかだろう。「帝国日本の写真：レンズの背後と向こう側」と題するセッションは、プログラムでも「日本」ではなくInterarea Border-Crossing Panel, つまり「地域間越境パネル」に分類されていた。今回のAASでの「帝国日本」の写真関係の発表は、複数のセッションに分散していたが、それらを集めて巧みに編集すれば、それだけで直ちに優れた書物が出来上がるだろう。

Joseph R. Allen は、日本支配初期の台湾写真が、征服の行程で、定住地としてではなく旅程としての島を映像化し、それが入植者のみならず被植民者にとっても永続的な原風景として機能してゆくその原点を確かめる。

Hyung Il-Paiは、朝鮮・韓半島に舞台を移して、日本の半島統治と旅行産業の展開のなかに殖民地都市の日常を活写し、朝鮮地方色の定型化を跡づける(それより長いversionは、論者が昨年組織した学会 Inaga (ed.) *Queering Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Today* *Conflicting Visions of 'Asia' under the Colonial Empires*, IRCJS, 2011, 非売品, に収録されている)。

軍事と報道とは単純に同一視できない、とするのが本パネルの基本的主張だったが、Paul D. Barclayは、第二次日中戦争期に台



図7 ハリソン・フォアマン
《香港》 1944

湾に滞在し、結果的に日本統治を支持する報道写真を提供した米国人写真家のHarrison Forman「図7」に焦点をあて、政治的検閲と自己検閲との相乗を検証する。

Julia Adeney Thomasは、初期の国際宣伝では斬新なプロパガンダ誌を発刊した戦時日本は、反面、国内報道では写真の活用に消極的だった印象が否めないとして、普遍的な技術であるはずの写真が、その社会的・イデオロギー的使用条件においては、およそ普遍的な効能を発揮したわけではなかったとの仮説を展開する。

Laura Heinは見事な即興の講評を展開したが、そのなかで、資本力に乏しい日本の写真産業は限定された数の写真を使い廻すことで、結局は膨張する日本帝国について紋切り型の映像を反復し、敗戦後ほどなくその生命力を消耗したと総括した。私見では、これら最後のふたつの議論は、魅力的ではあるが、ともにやや状況論的な観察にとどまっている。一方では37年以降、物資統制に加え、アート紙生産に必要なカゼインの輸入が停止したことで、写真雑誌の質が著しく低下したといった物理的な事情、あるいは戦時統制とメディア映像検閲の現場についての「神話」の解体など、近年のメディア研究の成果も動員する必要がある。さらに日本内地では、横浜お土産写真

から絵葉書流行へと40年を費やした展開が、韓半島では20世紀初頭に同時現象に圧縮され、戦役と相乗的に発生した。こうした時差や地政学的条件の差が植民地図像にどのような特性を与えたかは、台湾、韓国、関東洲、さらに1931年の満洲国成立と比較考量して精緻に検討する余地が残っている。

Session 345: Constructing a Multi-ethnic Utopian Culture in Manchukuo (Room 301B 2:45PM-4:45PM)

その満洲国についてConstructing a Multi-ethnic Utopian Culture「多民族理想郷文化の構築」と題したセッション。Annika A. Culverが、転向後の福沢一郎「図8」ら元超現実主義の画家たちの満洲像を説き、Kari Shepherdson-Scottの「淵上白陽と満洲写真作家協会における美術性の検討」が代読され、満洲関係の漢族医学誌を専攻し、資料収集家でもあるNorman Smithが「若元」(わかもと)など、日本より移入された民間常備薬の広告を、中国語側からいささか針小棒大に検討し、Victor Zatspeineがハルビンで『光は東方より』ほかの親日プロ・ファシストのロシア語雑誌を編集していた詩人集団の運命を説き起こした。

最後にRonald Suleskiが古参の研究者としての体験も交えながら、満洲国の歴史と



図8 福沢一郎《牛》1936

文化の概論を一般の聴衆に向かって披露した。

発言はせずに座っているつもりだったが、いかにも事情通の日本人参加者が、それは達者な英語で日本での研究の沿革を述べ、豊田市美術館での「近代の東アジアイメージ」[図9]展に言及されたので、黙っているわけにも参らなくなった。天野一夫が企画したこの大掛かりな展覧会には、福沢や清水登之[図10]、鈴木保徳らの満蒙風景も展示されたが、その図録巻頭論文で紙面不足ながら満蒙関係、熱河占領からハルハ河へ、を扱ったのが当方だったからである。

以下、最低限の情報提供に過ぎないが、五十殿利治が最近刊行した編著『帝国と美術 1930年代の日本の対外美術戦略』(国書刊行会, 2010)に収められた飯野正仁による満洲美術年表の増補決定版は、本分野の研究では不可欠の基本的参照文献だろう。これらは大谷省吾による先駆的な「地平線の夢」展を補う位置にある業績である。すでにKari Scottの先生であるG. Weisenfeldには写真雑誌*Front*を分析した周到な論文を*Positions*誌に掲載しているが、淵上白陽との関係でいえば、何度も言及された稀観の『満洲グラフ』[図11]全巻復刻版が、解説を付してゆまに書房より出版されたばかりのところ、今後の研究に裨益するだろう。また呂元明教授原案企画による『満洲文化

事典』が鈴木貞美・劉建輝との共編で、まず日本語版を優先してちくま学芸文庫より刊行されることが、先ごろ正式決定されたところだ。ロシア人関係でひとつだけ触れておくならば、1936年に日本側に亡命して、スターリンによる粛清開始の情報を伝えたリュシコフ大将の足跡をあらためて発掘する作業などは、まだこれからの課題だろう。日本では、外交史や政治史ではなく、満洲文化史を対象とする研究班が複数活動中だが、国際日本文化研究センターの劉准教授による研究班には、Suleski教授も旧知の岸陽子先生、尾形洋一氏なども参加し、通称



図9 「近代の東アジアイメージ」展ポスター



図10 清水登之《突撃》 1943

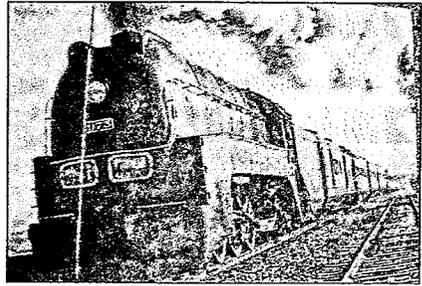


図11 『満州グラフ』 11月号 1934

「日中文庫」もこちらに移管されており、三月末に目録の刊行がなったばかり。まもなく目録も電子回路で検索可能となる予定。この分野での国際共同研究が期待されている状況にある……。

筆者なりに、こうした補足発言を手短に行なった。なお、件の恐るべき日本人発言者は、柳宗悦と民藝関係の業績でよく存知あげの中見真理氏の夫君、東京外国語大学の中見立夫教授であることが、あとで判明して恐縮した。

この時間帯には、並行して当方の旧知の友人たちが主宰あるいは参加するセッションが五つほど開催されていたが、残念ながら会場を回って傍聴するだけの時間的余裕はない。通りがかりに韓国のLim Jie-Hyunや台湾のJoyce Chi-Hui Liuに挨拶して、Naoki Sakaiへの伝言を託し、Keijiro SugaにLevi Hideoについて書いた雑文を手渡し、Bert Winther-Tamakiと数か月ぶりの再会を喜び、同僚のJohn Breenに欠席を詫び、というのが精一杯。夕刻7時過ぎからは国際交流基金や燕京学院での応接と並行してJAHF日本美術史論壇の会合などもあったが、同時多発ではとても廻りきれない。当方は存じ上げない若手研究者たちから次々に声をかけられて感うのは、馬齢を重ねた証拠。とはいえ数度にわたり、「国際日本文化研究センターの鈴木貞美先生ですか」

と尋ねられたのには参った。著名な同僚を持つと。思わぬとばっちりを蒙る。

同日夕刻には会場屋上で全体レセプションがあり、参加者の彬子女王がAASからの急な要請をうけ、日本人代表として震災への支援に対し返礼をなされた。一方、国際交流基金では、折からの東日本大震災ゆえ、急遽本省から酒類の提供は「自粛」を命じられたとかで。こちらの応接会場は閑散として人影もまばら。韓国や中国、台湾などの関係者レセプションの大盛況ぶりとは雲泥の差となって、必要な求心力を発揮できず。震災日本の凋落ぶりを参加者に印象付けた。国内納税者からの批判を懸念しての指示だろうが、かえって来賓を敬遠せしめるに等しい「外交下手」。無粋な接待忌避の「弔意」表明が、無残だった。会場にはアジア歴史資料センターの平野健一郎先生もお見えだったが。問わず語りにこう漏らされた。所員派遣への国際交流基金の支援は貴重ですが、学術会議の席では公的資金は伏せておくのが穏当でしょうね、と。

* なお熱心な読者にはAAS-ICAS Joint Conference, Honolulu, Hawaiiのホームページ参照をお勧めしたい(<http://www.asian-studies.rug/>)。800件近いセッションのすべての論文の英文要約が参照可能であり。以下の記事の参照番号と照合すれば、筆者の見解と論文要約との関係や異同もご理解いただけるはずである。